

福岡市の空襲にあって

長崎県島原市 東 嶺男

太平洋戦争が風雲急を告げる昭和20年6月19日、福岡市はB29編隊による大空襲を受け、大きな被害を蒙った。

当時、B29による日本本土来襲はいよいよ激しくなり、夜になると空襲警戒警報が発令され、暗い灯火管制の下で不自由な生活を毎日送っていた。B29は対馬海峡に機雷をまき、飛び去っていたようである。

福岡市が空襲を受けたのは6月19日の夜、ラジオで「只今、B29の編隊が佐賀上空を通過中」との警報が出された直後のことであつたと思う。雨がひどく降りそそぐような「ザア、ザア」という投下音の後に、「パン、パン」と焼夷弾がはじける音がして、朝日館という映画館があつた南の方向に赤い炎があがった。すわ福岡も空襲をうけたかと、母、私と弟妹の5人は防空頭巾をつけ、かねて準備していた各々のリュックとカバンを背負って、家の横の空地につくってあつた大きくて堅固な防空壕に急ぎ待避した。家の中には畳の下に一家が入る狭い壕がつくってあつたが、これはあぶなくて役に立たなかつた。壕の中には数人の人が避難されており、奥の方でおばあさんが大きな声でご念仏を唱えておられる姿が印象的であつた。壕の入口からおそろおそろ空を見上げると、探照燈の交錯する光線の中にB29の機影が小さく見えた。初めて空襲にあい、緊張していたせいか、のどがからからにかわいた。幸い母がヤカンに水をいっぱい入れて持ってきていたので、それでのどをうるおし、やっと落ち着きをとりもどした。暫くして硝煙くさい臭いがあたりに漂い、白い煙が広がってきた。そこで、『もっと安全な場所に避難した方がよいのではないかと』思案したが、とにかく移動することがあぶないのでもう少し様子を見ることにした。その後、心配するような状況がなく、空襲が終わった。

その頃、私の家は渡辺通り1丁目電車通り交差点からすぐ東に入った春吉花園本町という町名にあつた。近くに山田医院という内科の病院と、すぐ前には確か「みつはし」という料亭があつた。家の天井は焼夷弾が投下された場合の危険を考えて、天井板はすべてはずされ、屋根裏がみられる状態であつた。

渡辺通り1丁目から博多駅の方に行く電車通りは、周辺の強制疎開のため隣の地区とは相当の道幅があり、道の一つ隔てた近くの地区に焼夷弾が投下され、火の手があがったのであるが、そうした疎開のおかげで私宅のある方面（春吉方向）は延焼をまぬがれたのである。

戦後、福岡にでかけた際、もと住んでいた場所を尋ねてみた。住居のあつた一带はホテルオータニと新しい商店街ができており、昔の面影は全く残っていなかつた。

空襲の夜があけて、天神方面に被害がひどくでていると聞き、私が務めていた会社の上司（大変お世話になった平岡様）が岩田屋デパートの隣り、今の富士ビルが建っている場所に住んでおられたので、自転車に乗って渡辺通りの電車路をつっ走り、天神に出た。岩田屋デパー

トの窓ガラスが無残にも割れて通りに飛び散っているさまを横にみて、平岡邸にかけつけた。由緒ある門（あとで大名小学校に寄付されたと聞いている）は焼失を免がれていたが、家屋の一部が焼け、まだ白い煙があがっていた。

上司はホースをもって焼けた家に懸命に水をかけておられた。ご家族は無事であったことを知り、家に引き返した。早速、母に「おにぎり」と「みそ汁」をつくってもらい、みそ汁は魔法びんに入れて再び自転車に乗り、届けに行き大変喜ばれた。今思うとその「おにぎり」は白米であったが、米飯などなかなか食べられない時代によく家にあったものと思う。おそらく母が田舎に買出しに行き、大事な衣類と交換して貯えておいていたものではなかったろうか。その母も亡くなって9年になる。

8月になって広島に原爆が投下された。広島で応召勤務中の父が亡くなった旨通知があり、ただ茫然としている間に終戦となった。終戦を迎えた福岡の街は流言飛語がとびかい、大八車に荷物を乗せて疎開を始めた人もいて、近くの道路は一晩中騒然としていた。今にもすぐ汽車が止まってしまうのではないかという噂がひろがって、母と妹、小学生の弟たち3人をまず、両親の故郷である島原にかえすことにした。その時の汽車は無料で乗せてくれた。暫くして私も島原へ引きあげたのであるが、早いもので島原在住はもう50年になる。

先般、雲仙・普賢岳の噴火活動は「ほぼ停止した」という嬉しい火山噴火予知連の発表があった。噴火前は緑が美しく秀麗な普賢岳の山肌が、みじめにも茶褐色に変貌してしまったのを見るにつけ、一日も早く噴火活動が終息し、安心して住める静かな水と緑の城下町島原の町になる日を切に願っている。